

## 昭和四十一年から四十五年までの弘南寮の思い出

四十五年 電工 若松 秀俊  
東京医科歯科大学 名誉教授

### 平時の弘南寮

昭和四十年年度の学芸学部から教育学部への名称変更闘争が終息した後の昭和四十一年に小生は工学部電気工学科に入学した。その時期の寮長は山田 嗣（四十三電工）であった。会計は佐藤允夫（四十三建築）であった。当時、寮費は月当たり五百円、一食につき、朝食が四十円、夕食が六十円であった。表を使った全員予約制であった。部屋やトイレは入寮時に即、退寮を決定するほど如何にも不潔な寮であった。これらは、ホームページに掲示された写真や寮母（おばちゃん）の飯沼とし子と寮生らとの生活写真を見れば部分的に理解できる。



昭和41年 ファイアストーム  
酒の飲みまわし



昭和41年入寮歓迎コンパ

周囲の先輩から許してもらおうという寸法であった。その後、当然のことながら酔いっぶれて自分の部屋でひっくり返っていた。

まず、入寮の歓迎会までにどんぶり二個を近くで購入して台所の所定の場所に入れた。歓迎会では前年入寮者からやかんで爛した清酒をどんぶり一杯飲まされた後に、歌を強制され、さらに一杯ごとに飲まされ、追加の歌を義務化され、さらにどんぶり一杯の酒を重ねて、合計三杯をもって



昭和41年源家ゆかり金沢八景稱名寺にて

一時間ほど、経過すると頭が載った枕を先輩から蹴られて叩き起こされ、運動着に着替えさせられて、近隣の源氏ゆかりの有名な称名寺に、先輩から自転車で誘導されての夜道のジョギングが待っていた。到着後に称名寺で撮った写真が残っている。

#### 寮祭のために

その後、五月の寮祭では寮長山田 嗣の強力な指揮の下に、四年生を除いてその開催準備を総掛りで行った。近所から丸太など木材を借りて、舞台を作った。写真のように即席ラーメンを食べながらの作業であった。寮祭当日は、午前中は金沢文庫駅まで、すべて自作の衣装で女装した寮生がでかけて、公衆の面前で寮祭のデモンストレーションを行った。午後のお出し物は、寮祭を楽しみにしていた近所の婆さんの踊りや我々の演出・出演の「白鳥の湖」や前記女装のラインダンスであった。それが済んで、夕方は卒業生の先輩を畳敷きにした寮食堂に招いてのコンパが行われた。就寝時にも、話が続き、先輩から「書き上げた卒論を麻雀をしていた時に紛失して、危うく留年」の話が夜中まで聞けた。そんな経験が今でも同窓会で蘇る。



昭和 41 年 東京女子大学 1 年生との合ハイ



昭和 41 年 寮祭 舞台製作

この行事に前後して、東京女子大学一年生との合ハイがあった。天気に恵まれた楽しい一日であった。何人かはこれから文通が始まったと聞いている。

#### 混乱の中の弘南寮

それから昭和四十四年の秋までは通常の学生生活であった。小生が後期の寮長に選出された。四年生や会計と同様の四畳半の個室をあてがわれた。しばらく変わったこともなく、前期までの単位も通常の日程に従って、獲得した。単位は充分であったので、翌年は間違いなく四年生進級であろう。

と思っていた。ところがこれが思いがけず翌年の一月の全学ストライキに変わり、昭和四十四年十一月の封鎖の解除に至るまで続くことになった。ことの発端は昭和四十三年の学生部のスパイ事件であった。その実は、工学部厚生係による学生の行動の秘密調査が発覚したことからであった。学生の生活状況、政治活動などをチェックして記録していたということであ

った。これがかなり偶然のことからして発覚した。怒った工学部学生は工学部学生会を開いた。そこでの協議の細部の記憶はないが、工



昭和 41 年寮祭 舞台製作の合間



昭和 41 年 山田の演出による 白鳥の湖  
舞台の左端が小生（ジークフリード王子）



昭和 41 年寮祭 舞台での  
ラインダンス

学部が無期限ストライキに入っている決議が採択されたのが、昭和四十四年二月であった。最後の授業は芹沢康夫助教授の回路理論であった。好きな科目が途中で中断した。この決議がどのようにして、全学に波及して、全学共闘会議に発展したかは、不明である。

この年度については、三月には全く正常な形で卒業が、そして寮では卒業が行われた。やがて、闘争が純粹性を失い、ストライキの性格が変質し、全学共闘会議の既存のセクトに主導権が移り、工学部側からの対応の有様も変化した。これらの対応に小生も嫌気がさし、外国の大学に眼を向けることになった。昭和四十四年度に入ると、弘南寮は寮大会をへて、何らかの意思統一が行われた。他寮はいざ知らず、弘南寮では直接の大きな行動はなかったが、友人同士の議論は夜を通して行われたこともあった。

この時期、入寮選考は行われたが、「入闘を歓迎」する名目になった。寮祭は中止になった。寮祭ができなくなって先輩との交流が絶たれた。せめて寮祭が続いていたら…… 他の行事はほとんどすべて廃止になった。この間、電気工学科の記念代の個人積み立ての預金はすべて闘争資金に化けて、卒業記念は「名教自然」前の写真一枚だけであった。泥沼化のなか十一月になって、学生大会でストライキ解除が行われてから



昭和42年3月 追い出しコンパ



昭和41年 祭祭の後で先輩とともに



昭和41年 祭祭演舞台を背にして

は、電気工学科での教官との話し合いがあり、一月になってから、単位認定があつて、卒業研究室の選択を話し合いやくじ引きで行い、さらに大学院選抜を含め、五月三十一日を正式な卒業日として、大学側から提案の後に決定された。大学院はすでに、横浜国立大学の以外には、進学不可能となり、通常なら大学側から行われる推薦入学は全廃され、例外なく入学試験が行われた。

### 通常への回帰

大学院へは六月一日付けで進学し、講義はほぼ当て通りに行われた。夏休み期間を廃止して、大学院学生の実験時間への充当を経て、秋には通常のカリキュラム時間に戻っていった。このころ、指導教官中西邦雄教授の指導のもとに、直接の指導教官の関口隆助教授と一緒に、彼の研究協力関係から東京医科歯科大学、国立公衆衛生院で生理学の研修をさせてもらった。これが切っ掛けで、この時期以前から興味を持っていた生物学、電気生理学の学習のために、ドイツ医学部の感覚生理学専門のカイデル教授のもとへの留学を志すことになった。

大学院終了時に、ドイツ学術交流会の奨学生に応募して合格した。しかし先方の都合で延期になったが、十月に東京医科歯科大学医用器材研究所に就職し、在職中に再度応募して、翌年エルランゲン・ニュルンベルク大学の医学部生理学研究所バイオサイバネティクスに留学することになった。(文中敬称略)

記述の誤りがあれば、ご指摘ください。令和二年九月二十日